

二〇二四年度

札幌大谷大学短期大学部 保育科

一般選抜（Ⅱ期）

国語総合

注意事項

- 1 試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題冊子は六ページあります。
- 3 試験中に印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて試験監督者に知らせてください。

問題一、次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（文章は設問のために、一部改変している）

インターネットの「フキユウ」は、社会における情報のアクセス方法やコミュニケーションの方法を劇的に変化させた。人々はSNSなどのプラットフォームで意見や情報を自由に共有し、瞬時に大勢の人々に情報を届けることができるようになり、^①人類総メディア時代が到来した。それに伴い、「ネット世論」という言葉をよく耳にするようになった。インターネット上では多様な人が様々な意見を言っており、政治的運動もしばしば起こっている。マスメディアもそのようなインターネットを人々の意見の場として取り上げ、報道することが少なくない。

（i）、実はインターネット上の意見分布が大きく歪んでいることが、筆者の実証研究で明らかになっている。それを世論としてマスメディアが報じたり、政府・政治家・企業・個人もそう捉えたりすることで、大きな問題が引き起こされていることを筆者は危惧している。

^②なぜインターネット上の意見分布は歪むのか。それは、インターネット上の意見には能動的な情報発信しかなかったためである。（ii）、言いたいことのある人だけが言い続ける言論空間だ。その結果、極端な意見や強い信念を持った人々が大量に発信することが容易になっている。これは、通常行われるような世論調査が、聞かれたから答えるという「A」な発信であるのと逆である。

筆者は2018年に、20〜60代の男女3095人を対象としたアンケートを実施し、意見の強さとSNSの「トウコウ」行動の関係を分析した。具体的には、ある一つの話題——ここでは憲法改正——に対する「意見」と、「その話題についてSNSに書き込んだ回数」を調査し、分析した。分析では、「非常に賛成である」〜「絶対に反対である」の7段階の選択肢を用意し、回答者の意見とSNSに「トウコウ」した回数を収集した。

そのデータから、回答者の意見分布とSNSでの「トウコウ」回数分布を分析した結果、まず、回答者の意見分布は「どちらかといえば賛成（反対）」、「B」といった「中庸」的な意見の多い山型となった。しかし、SNSの「トウコウ」回数分布は、最も多いのが「非常に賛成である」人の意見（29%）で、次に多いのが「C」人の意見（17%）という、谷型の意見分布になったのである。この強い意見を持っている人たちは、回答者には7%ずつしか存在していなかったにもかかわらず、SNS上では合計46%の意見を占めていたのだ。

インターネット上の意見分布が歪んでいる^③証左は他にもある。東京大学の鳥海不二夫教授の研究によると、20年の東京都知事選挙において、ツイッター（現X）上の言説を分析したところ、二つのクラスターが観察された。大きいクラスターには現職の小池百合子都知事への批判ツイートが多数含まれていた。もう一つのクラスターには、諸派の候補を支持する内容などが含まれていた。このように、ツイッター上には小池都知事を支持するような言説はあまり見られなかったが、選挙結果は小池氏が366万票を集めてトップであり、2位の宇都宮健児氏は84万票と、小池氏の圧勝といってもよいものであった。

昨今、マスメディアは情報の取得源としてインターネットを頼りにしている。しかし残念なことに、その際に^④このバイアスを見落とすことが多い。特に、SNS上でのトレンドやバズといった情報は、多くの人々の意見を反映しているように見えるが、実際には一部の^⑤ノイジーマイノリティーの意見が目立っていることも少なくない。その結果、^⑥サイレントマジョリティー、すなわち静かに意見を持っているがそれを公然と表現しない大多数の声が、マスメディアに拾われない。

この現象がもたらす^⑦社会的な影響は大きい。ノイジーマイノリティーの声が過度に強調されることで、社会の中での意見や価値観の多様性が失われる恐れがある。また、一部の声ばかりがマスメディアを通じて大きく取り上げられてお墨付きを得ることで、不要な対立や誤解を生む可能性もある。

（iii）、一部の声が多数派として伝わり、公共の議論や意思決定の参考とされてしまう。

この問題を解決するためには、マスメディアがインターネット上の情報を取り扱う際のアプローチを見直す必要がある。まず、インターネット上の

情報を取得する際には、その情報が本当に多くの人々の意見を反映しているのかを入念に確認したうえで、多様な情報源を横断的に調査し、様々な意見をバランスよく収集することが大切だ。また、重要なテーマについては必ず意見調査やアンケートを行い、人々の受動的な発信による意見分布を把握しておく必要がある。さらに、扱うテーマに関する⁽⁴⁾センモンカの意見や分析をより多く参考にし、インターネット上の声に振り回されない質の高い報道を行っていくことも重要だろう。

加えて、社会全体として、情報を受け取る側のメディア情報リテラシーを高めることも必要である。人々が、情報の発信元やその背景、バイアスなどを疑問視する姿勢を持つことで、一部の意見が過度に強調されることの影響を軽減することができる。

筆者はよく「ネット⁽⁵⁾世論はない」と指摘している。そこには確かに人々の生の声があるが、それをストレートに社会全体の意見として捉えるのはあまりにも大きなリスクがある。社会の声のバランスを取り戻すためには、マスメディアと情報を受け取る側の双方が、その課題に向き合い、適切な対応を取る必要がある。

(山口 真一 「ネット世論」の歪み 一部の声が多数派にリスク認識を」 2023年9月15日 朝日新聞 朝刊)

問一 傍線ア～オについて、カタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

問二 (i) ～ (iii) に入る接続詞を次から選び答えなさい。

・さらに ・しかし ・ところで ・つまり

問三 傍線①「人類総メディア時代が到来した」とは、本文では具体的にどのようなことを指すのか。本文の言葉を使って六〇字以内で答えなさい。

問四 傍線②「なぜインターネット上の意見分布は歪むのか」その理由を本文から探し二七字で書き抜きなさい。また、それを裏付けている東京大学の鳥海不二夫教授の研究内容について七〇字以内で説明しなさい。

問五 【A】に入る言葉を本文より探し、漢字三字で書き抜きなさい。

問六 「 B 「 C 「 に入る回答者の意見を次から選び答えなさい。

・賛成である ・どちらともいえない ・反対である ・絶対に反対である

問七 傍線③「このバイアス」とは何か。本文の言葉を使って八五字以内で説明しなさい。

問八 傍線④「ノイジーマイノリティー」の意味を本文の内容を参考に二五字以内で説明しなさい。

問九 傍線⑤「サイレントマジョリティー」の意味を本文から二八字で書き抜きなさい。

問十 傍線⑥「社会的な影響」について、本文の言葉を使って三点答えなさい。また、その解決方法について要約されている部分を本文から探し三八字で書き抜きなさい。

問十一 傍線⑦「世論」の意味を、本文から探し、七字で書き抜きなさい。

問十二 インターネットから得た情報の活用について留意すべき点は何か。本文を参考にして、あなたの考えを五〇字以内で書きなさい。

問題二、次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（文章は設問のために、一部改変している）

①精神科医になって五年が過ぎ、六年目にはいった頃でした。この時期は、精神科医として多少の自信をつける半面、自分の未熟さにまだ道遠と思う、相反する気持ちに揺れ動く頃です。要するに、精神科医の仕事そのものと、その根底にある精神医学の限界に気づき始めた時期だったのです。

例えば研修医の頃、うまく治ってくれたと思った患者さんが、何年か大学外の病院をローテーションして大学に戻ってみると、また再入院してたりします。しかも前よりも重症になっているのです。かと思うと、大学の外に出る前に入院していた患者さんが、そのまま入院生活を続けていたりするのです。いったい精神科医は医師としてどれほどのことができるのだろう。いやそもそも医学の大きな分野のひとつである精神医学そのものに、どれだけの力があるのだろう。そんな不安感にさいなまれ、自信をなくしかけるのが臨床五、六年目の精神科医と言っているかもしれません。

そんな折、眼に飛び込んできたのが、「共感に向けて。不思議さの活用」という表題を持つ論文でした。何だこれは、と思いました。へ共感（empathy）は分かります。精神科医になりたての頃から、これは嫌というほど教えられ、実際に患者さんと接する中で的重要性も痛感させられます。簡単に言えば、「相手を思いやる心」です。

とはいえ、これが「バクゼン」として、かつ奥が深く、体得するにも一筋縄ではいかないのです。

その「共感」と「不思議さ」を結びつけた論文ですから、驚きつつ立ったまま頁をめくり、本文を読み始めました。②著者など、どうせ知らない名前なので、眼中にありません。医学論文にはまず冒頭に要約があります。それはこうなっていました。

——人はどのようにして、他の人の内なる体験に接近し始められるだろうか。共感を持った探索をするには、探究者が結論を棚上げする創造的な能力を持つていなければならぬ。現象学や精神分析学の創始者たちは、問題を締めくくらない手順、つまり新しい可能性に対して心を開き続けるやり方を、容易にする方法を発展させた。加えて、フッサールの現象学的還元と、フロイトの自由連想という基本公式は、芸術的な観察の本質を明示したキーツの記述と、③際立つた類似性を有している。体験の「カクシン」に迫ろうとするキーツの探究は、想像を通じて共感に至る道を照らしてくれる。

フッサールとフロイトなら、共感について考える際、当然引用されるかもしれない。しかし詩人のキーツがどうしてここに出てくるのか。不思議に思っただけで読み進めていく先に、④「ネガティブ・ケイパビリティ」の記述があったのです。

今では有名になった兄弟宛ての手紙の中で、キーツはシェイクスピアが「ネガティブ・ケイパビリティ」を有していたと書いている。「それは事実や理由をせつかに求めず、不確かさや不思議さ、懐疑の中にいられる能力」である。

能力と言えば、通常は何かを成し遂げる能力を意味しています。しかしここでは、何かを処理して問題解決をする能力ではなく、そういうことをしない能力が推賞されているのです。しかもその能力を、かのシェイクスピアが持っていたというのですから、聞き捨てなりません。さらに読んでいくと、キーツが詩人について語った部分も引用されていました。

詩人はあらゆる存在の中で、最も非詩的である。というのも詩人はアイデンティティを持たないからだ。詩人は常にアイデンティティを求めながらも至らず、代わりに何か他の物体を満たす。神の衝動の産物である太陽や月、海、男と女などは詩的であり、変えられない属性を持っている。

ところが、詩人は何も持たない。アイデンティティがない。確かに、神のあらゆる創造物の中で最も詩的でない。自己というものが無いのだ。

ここに至って、キーツの真意がようやく読み取れた気がしました。アイデンティティを持たない詩人は、それを必死に模索する中で、物事の本質に到達するのです。その宙吊り状態を支える力こそがネガティブ・ケイパビリティのようなのです。キーツはネガティブ・ケイパビリティの権化として、シェイクスピアを引き合いに出しています。しかし本当は、詩人こそネガティブ・ケイパビリティを身につけるべきだと説いているのです。

不確かさの中で事態や状況を持ちこたえ、不思議さや疑いの中にある能力——。しかもこれが、対象の本質に深く迫る方法であり、相手が人間なら、相手を本当に思いやる共感に至る手立てだと、論文の著者は結論していました。

著者の所属は、ハーヴァード大学医学部精神科となっていました。しかし、著者がどういう人物かは知らず、三十年経った今でも分かりません。キーツのネガティブ・ケイパビリティを知ってからは、著者のことなどどうでもよくなったのです。

医学論文はそれまでも多数読んでいましたし、その後も現在まで数えきれないほど読んでいます。しかし、この論文ほど心揺さぶられた論考は、古希に至った今日までありません。このとき衝撃をもって学んだネガティブ・ケイパビリティという言葉が、その後もずっと私を支え続けています。難局に直面するたび、この能力が頭をかすめました。この言葉を思い起こすたびに、逃げ出さずにその場に居続けられたのです。その意味では、私を救ってくれた命の恩人のような言葉です。

〈問題〉を性急に措定せず、⁽⁴⁾生半可な意味づけや知識でもって、未解決の問題にせっかちに帳尻を合わせず、宙ぶらりんの状態を持ちこたえるのがネガティブ・ケイパビリティだとしても、実践するのは容易ではありません。

なぜならヒトの脳には、後述するように、「分かる」とする生物としての方向性が備わっているからです。さまざまな社会的状況や自然現象、病気や苦悩に、私たちがいろいろの意味づけをして「理解」し、「分かった」つもりになろうとするのも、そうした脳の傾向が下地になっています。

目の前に、わけの分からないもの、不可思議なもの、嫌なものが放置されていると、脳は落ちつかず、及び腰になります。そうした困惑状態を回避しようとして、脳は当面している事象に、とりあえず意味づけをし、何とか「分かる」とします。世の中でノウハウもの、ハウツーものが歓迎されるのは、そのためです。

「分かる」ための窮極の形がマニュアル化です。マニュアルがあれば、その場に展開する事象は「分かった」ものとして片づけられ、対処法も定まります。ヒトの脳が悩まなくてもすむように、マニュアルは⁽⁴⁾コウアン⁽⁴⁾されていると言えます。

ところがあとで詳しく述べるように、ここには大きな落とし穴があります。「分かった」つもりを理解が、ごく低い次元にとどまってしまい、より高い次元まで発展しないのです。まして理解が誤まっていれば、悲劇はさらに深刻になります。

私たちは「能力」と言えば、才能や才覚、物事の処理能力を想像します。学校教育や職業教育が不断に追求し、目的としているのもこの能力です。問題が生じれば、的確かつ迅速に対処する能力が養成されます。

④ネガティブ・ケイパビリティは、その裏返しの能力です。論理を離れた、どのようにも決められない、宙ぶらりんの状態を回避せず、耐え抜く能力です。

キーツはシェイクスピアにこの能力が備わっていたと言いました。確かにそうでしょう。ネガティブ・ケイパビリティがあったからこそ、オセロで嫉妬の、マクベスで野心の、リア王で忘恩の、そしてハムレットで自己疑惑の、それぞれ深い情念の炎を描き出せたのです。

私たちが、いつも念頭に置いて、必死で求めているのは、言うなればポジティブ・ケイパビリティ (positive capability) です。しかしこの能力では、

えてして表層の「問題」のみをとらえて、深層にある本当の問題は浮上せず、取り逃してしまいます。いえ、その問題の解決法や処理法がないような状況に立ち至ると、逃げ出すしかありません。それどころか、そうした状況には、はじめから近づかないでしょう。

なるほど私たちにとって、わけの分からないことや、手の下しようがない状況は、不快です。早々に解答を捻り出すか、幕をおろしたくありません。しかし私たちの人生や社会は、どうにも変えられない、とりつくすべもない事柄に満ち満ちています。むしろそのほうが、分かりやすかったり処理しやすい事象よりも多いのではないのでしょうか。

だからこそ、^⑤ネガティブ・ケイパビリティが重要になってくるのです。

(帯木蓬生 『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』 朝日選書)

問一 傍線ア〜オのカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

問二 傍線①「精神科医になって・・・頃」とあるが、この頃はどのような時期であるか。文中から四〇字以内で探して答えなさい。

問三 傍線②「著者など、どうせ・・・眼中にない」とあるが、「眼中にない」とはどういうことかわかりやすく説明しなさい。

問四 傍線③「ネガティブ・ケイパビリティ」の記述があった」とあるが、「ネガティブ・ケイパビリティ」とはどういう能力であるか。文中から探し最初と最後の五文字を書き抜きなさい。

問五 著者が読んだ「共感に向けて。不思議さの活用」という論文の著者は、「ネガティブ・ケイパビリティ」という能力について、どう結論したか。文中から三〇字以内で探して答えなさい。

問六 傍線④「ネガティブ・ケイパビリティは、その裏返し能力」とあるが、どういう能力か。文中から探し四〇字で答えなさい。

問七 傍線⑤「ネガティブ・ケイパビリティが重要になってくる」とあるがなぜか。文中の語句を使って七〇字以内で答えなさい。